

にいがた

北から南から

「良寛の里(出雲崎・和島・与板・寺泊・分水)9条の会」に取り組んで・寺泊を中心に

山崎 徹

昨年の10月末、私の町内のWさんから私に「9条の会に」と5万円のカンパが届けられた。高額なカンパであったので改めてお礼に伺い、Wさんからお話を伺った。

「私は、大正14年生まれて戦争に行かされた最後の年代なんだ。毎年同級会をやっていたが、人数も少なくなりできなくなってきた。積み立ててきたお金をどうしようかと残った者で相談したら、9条の会に使ってもらおうのが一番いいということになった。」と話された。Wさんは、寺泊郵便局長や町内会長を務められた方。私は、Wさんの話を聞き、「寺

泊では9条の会は市民権を得た」と実感した。「良寛の里9条の会」は、2014年9月、120名の参加で結成された。結成から3年間の活動を寺泊を中心に振り返り、9条の会が寺泊で市民権を得ることができるようになった要因を考えてみたい。

まず何よりも、戦争放棄と戦力不保持を誓った憲法9条は、「日本の宝 世界の希望」として深く住民に支持されている。

今年3月、会は、「戦争を語る会・聞く会」を開き、60名以上の参加を得た。参加された元寺泊町議で寺泊遺族会の会長Hさんは、

「私も父親がフィリッピンのマニラ湾のコレヒドール島で亡くなったことになっていきます。寺泊の海岸ばたに平和の礎があり、その中には寺泊の全戦没者の位牌が620体ぐらいい入っています。戦争には賛成できっこありません。憲法9条で今まで72年間守られてきたわが国が、世界で一番いい国ではないか。」と訴えられた。

会は独自に「戦争しない国 まもろいね

つなごいね 日本の宝 世界の希望 憲法9

条」の文言のポスターを作成し、寺泊では世帯数の約1割の300枚を普及した。床屋さんの入り口や商店の窓ガラス、各戸の玄関などに貼られている。前述のWさんは居間に貼ってある。通りに面したガラス戸に張り出した篠原佐一さんは、「戦争を語る会・聞く会」で、「…私と2歳年上の姉と親父の3人暮らしのところに赤紙が来ました。・・・駅で親父がみなさんにあいさつしていたんです。その時、姉が父親のスポンにぶら下がって、『とと、行くなえー、とと、行くなえー』と泣いているんです。私は、戦争に行つて死ぬのはえらいことだと思つていたので、泣かなかつたんですが、あんまり姉が泣くもんで、私も、『とと、行くなえー、とと、行くなえー』とスポンにぶら下がっていましたら、父親はつらかつたんでしょう。後ろを向いて下向きに、『泣くなつやー、泣くなつやー』と言つて……一年後に父は、テニヤンで玉砕しました。」と自身の体験を話された。篠原さんは、

会の呼びかけ人を引き受けた。

第二は、代表が浄土真宗大谷派興琳寺のご住職、中村興樹さんということである。興琳寺は我が家の菩提寺であり、中村さんが会の代表を引き受けられた経緯については、「教育情報117号」（2015年4月）に書いた。ご住職は、「私は、名前だけの代表です」と謙遜されている。しかし、通りに面した興琳寺の掲示板にはいつも「良寛の里9条の会」のポスターが張り出されている。戦争法廃止の2000万署名、寺泊では人口10000人弱で約2400人が署名した。ご住職が集めた署名には、自民党の県会議員（故人）の奥さんや最後の寺泊町長の後援会役員の名前もあつた。私も、「興琳寺さんが代表の9条の会の戦争法廃止の署名です」と署名に回つた。

中村さんは、「戦争を語る会・聞く会」で「……人間が営々と築きあげたものが戦争によつて一瞬に破壊され、そこに残るものがないものかみんな分かつていながらなかなか

にいがた

北から南から

か戦争がやまない、そういう人間の性を悲しみながら……残された生涯を『戦争しない』、小さい声ですが声を上げ」と述べられた。

中村さんに限らず、寺泊では会の活動に協力しているお寺が多い。宗派として9条の会に理解を示している大谷派はもちろん、浄土真宗仏光寺派、真言宗、曹洞宗のお寺……。そして、立正佼成会も。私は、それぞれのお寺のご住職とは、仕事や子どもの関係などで結びつきがあり、信頼関係を大切に行っている。

第三は、活動のスタイルと品格、会の民主的な運営である。

活動のスタイルは、会結成呼びかけチラシにある、「みんなで参加し、考えましょう……平和と日本の安全を……自衛隊を必要と考える人も、自衛隊を憲法違反と考える人も、中国・北朝鮮を心配な人も、アメリカの戦争に巻き込まれるのではないかと心配な人も」を大切にしている。住民の中に対立を持ち込むのではなく、「9条を守ろう」を基本にしな

していくという姿勢である。

また、住民の共感が得られるよう努めている。2015年8月、9月、安保法制（戦争法）が国会で緊迫した情勢の中、会は通称寺泊のアメ横で多い時は20名の参加でスタンディングなどの宣伝を行った。事前に、業者や働いている方々に、「お仕事や買い物に迷惑にならないように行います」という趣旨のチラシを配布し、理解を得られるようにした。

活動の品格は、中村興樹さんの「強くもなく、弱くもなく」の言葉に表れている。

2015年12月、会は若者を対象にしたチラシを会の全世帯約11400戸に新聞折り込みし、安保法制（戦争法）廃止の2000万署名への協力を訴えた。

そのチラシのタイトルは、「かなえない夢があるから、生きていきたい未来があるから、若者は『戦争法（安保法制）の廃止』を訴える」である。そのチラシには谷川俊太郎さんの詩、「せんそうしない」とシールズの、「私たちはたくさんの犠牲の上に得た日本国憲法



を、まだ完全に達成したとはいえないその理念を諦めることはできません。この腐敗した政治を見て絶望を感じながらも理想を掲げることをやめてはいけなしいし、命ある限り理想の実現に前進する努力を諦めません」「空気を読んでいては、空気は変わらぬ。武器を持ち、人を殺す国が普通の国だというなら、私はその普通の国を変えたい」という二つのスピーチを掲載した。

ポスターは電柱などに張り出さず、会員や協力者に届け、その活用はそれぞれの判断に委ねている。

会の活動、運営は、申し合わせ事項の「会の活動は、呼びかけ人の合議、合意で決めます」を逸脱しないようにしている。緊急な活動が必要なこともあるが、その場合も代表の中村興樹さんなどの了解を得て行っている。「合意されないことはしない」ということでもある。

西須賢一事務局長のがんばりで、事務局会議は月に一回、会のニュースは寺泊では20

0部配布。「戦争を語る会・聞く会」の内容は冊子にし、寺泊では300部普及。

多くの方々と力を合わせ、安倍改憲発議をさせない力……3000万署名に取り組んでいく決意である。

(やまざきとおる・長岡市寺泊)

150年目の北越戊辰戦争を語り継ぐ

板橋 育夫

祖父が語った北越戊辰戦争

小学生の頃、祖父・龍助から北越戊辰戦争の話聞いた。その時は気にも留めなかったが、40代を過ぎたころから「祖父の話は本当だったのだろうか」と妙に気になっていた。